

安樂行品第十四「不男」についての考察

菊岡 妙光

一、はじめに

株式会社電通において「電通ダイバーシティ・ラボ」は、二〇一八年十月に全国二十〜五十九歳の個人六万人を対象にLGBTを含む性的少数者¹⁾「セクシャル・マイノリティ」に関する広範な調査を行ったところLGBT層に該当する人は八・九%、十一人に一人が該当するという結果が出されている。これは左利きやA B型の人とほぼ同じ割合とされる。

LGBTとはレズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（心と体の性が一致しない人）の英語の頭文字を並べた総称であるが、身体的な特徴（身体の性）、服装としぐさ（社会的、文化的な性）、心の性（性自認）、恋愛の対象者（性的指向）を男性か女性かで表してみると、多様なセクシュアリティとなる。

妙法蓮華経安樂行品第十四に「五種不男」とある。『法華経』岩波文庫 坂本幸男・岩元裕 訳注に「五種の不男」とは、半陰陽の者、五種の男根不具の者で、①生不能男：生まれながら姪する能わざる者 ②半月不能男：男女両根を具して半月は姪し半月は淫すること能わざる者 ③妬不能男：男女二根を具して一根が淫を行ずるを見て他の根に妬心が起る者 ④精不能男：二根を具し一根が淫を行する時、変じて男根を失う者 ⑤病不能男：朽爛し或いは虫が

噉み、或は截り去られた者（十誦律卷二十一参照）と訳注されている。

「五種不男」とは現代でいうところの性的少数者ということなのだろうか、「不男」の考察を通して見えてきた仏教的観点を述べてみたい。

二、安樂行品「不男」の考察

『安樂行品第十四』抜粋

- ① 『二者安住菩薩行処 親近処 能為衆生 演說是經 文殊師利 云何名菩薩摩訶薩行処 若菩薩摩訶薩 住忍辱地 柔和善順 而不卒暴 心亦不驚 又復於法 無所行 而觀諸法如実相 亦不行不分別 是名菩薩摩訶薩行処』
- ② 『云何名菩薩摩訶薩親近処 菩薩摩訶薩 不親近國王王子 大臣官長 不親近諸外道梵志 尼犍子等 及造世俗文筆 讚詠外書 及路伽耶陀 逆路伽耶陀者 亦不親近諸有凶戲 相シヤ相撲 及那羅等 種種變現之戲 又不親近旃陀羅 及畜猪羊鷄狗 毘舍離 諸惡律儀 如是人等 或時來者 則為說法 無所希望 又不親近求聲聞比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 亦不問訊 若於房中 若經行処 若在講堂中 不共 住止 或時來者 隨宜說法 無所希求 文殊師利 又菩薩摩訶薩 不応於女人身 取能生欲想相 而為說法 亦不樂見 若入他家 不與小女 処女寡女等共語 亦復不近五種不男之人 以為親厚 不独入他家 若有因縁 須独入時 但一心念仏』
- ③ 『不樂畜年小弟子 沙弥小兒 亦不樂与同師』
- ④ 『若是人等 以好心來 到菩薩所 為聞仏道 菩薩則以 無所畏心 不懷希望 而為說法 寡女処女 及諸不男 皆勿親近 以為親厚』

●安樂行品の概要

・安樂行品は法華経を布教する者の心持ち、内面の在り方について説かれる。安樂行とは、どんな困難が来たろうと

も、自分で自身を安らかな心持ち、喜びの心持ち、安穩なる心持ちでもって修行するにはどうすればよいかということ。

・身安樂行は「菩薩の戒」ともいうべきもので、菩薩の修行を積む者の身の処し方、方法論が示されている。

●経文①―線*1の訳をみていく

『法華経』岩波文庫には

「求法者が如何なる対象にも心を惹かれることなく、それらのものの固有な特徴をありのままに観察するとき、そのようになるであろう。これらのものに疑惑を抱いたり、誤った差別をしたりしないことが、求法者の行動である。」

『現代日本語訳 法華経』には

「さらに、この世のなにもものにもとらわれず、この世のありとあらゆるものの真実のすがたを見抜き、それが良いとか悪いとか、自分の判断をくわえずに受け入れることにほかなりません。」

『法華経・全二十八章講義』には

「自分だけが法華経を信仰している偉い人物と思ってはならない、法華経という有難い教を学んで使っていくのみであるという心持ちになると、心に偏った見方をするのがなくなり、ありとあらゆるものの本性、道理が善き分かってくるようになる。わざわざ世間的に目立つようにせず、自分の好きな者だから親切にしたり、嫌いな者だから排除するという親疎の別を超え、分けへだてなく扱う心を持たなければならない。」

とあり、『法華経大講座』（*2）で「自分の心の中に起こってくる困難になるもの乗り越えていくことは、外から加わる困難を乗り越えていくことよりも更に難しい。心の中に増長した心持ちが起きたり、名誉を求める心持ちが起きたり、利益を求める心持ちが起きたりする。これを制することは困難である」とある。そして、真理に目覚め「仏陀」なるためには強韌な意思が必要である。人間には、目覚めを邪魔する数々の悪魔、つまり心のうちには

「迷い」がある。欲界の頂上に君臨している波旬という名の魔王は、さとりを開こうとしているゴータマ沙門に対し、さまざまに欲で邪魔をしてきた。富や名誉という金銭欲、権力欲。三人の美女という色欲などであった。しかし、ゴータマ沙門はこれらに少しも関心を示さなかった。そこで軍勢を送ったが、刀剣は折れ、矢は落ち、ゴータマ沙門を貫くことはできなかった。（『仏教早わかり百科』ひろさちや）
という仏話があるように自分の心を制することが何よりも難しいことがわかる。

●経文②と③の考察

・戒律

釈尊の教えが広がっていくともない、修行者の集まりであるサンガが構成された。サンガにおいて比丘の二百五十戒と比丘尼の三百五十戒がまとめられ、これらの戒でも特に五戒を犯すことは重罪で教団を追放された。

五戒とは、不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒である。不邪淫は「あらゆる欲を満たす行為において、不道徳な愛欲をいだいたり、性的な行為をしないということ」である。不男を考察するにあたり不邪淫戒に重点をおく。

・経文②の訳

「文殊師利菩薩さん。菩薩たる者は、女性に『この方はすてき！』というような心を生じさせる態度で、教えを説いてはなりません。むろん、女性に会いたいと思ってはなりません。もし、だれかの家を訪れるときは、幼い女の子とも未婚の女性とも未亡人とも、話をしてはなりません」（『現代日本語訳 法華経』）

また、半陰陽の者に教えを教えたり、懇意になったり、会釈をかえしたりしてはならない（『法華経』岩波文庫）

・経文③の訳

また、見習いの僧尼や、僧や尼僧や、若い男や若い女に関心をもってはならないし、かれらと懇意にしたり、おしやべりをしたりしてはならない。また、隠遁生活を重視してはならないし、絶えず隠遁して瞑想に専念してはならな

い。(岩波文庫 法華經)

・経文②と③より邪姪の対象は、幼い女の子、未婚の女性、未亡人、半陰陽の者、見習いの僧尼、僧、尼、若い男性、若い女性となる。これらの人びとは男性修行者にとって性的感情を抱く相手であり、境遇や立場、年齢等が違うだけで、この世で生きている人々である(老人の男女は含まれていない)。この中に当然のこととして半陰陽の者が含まれているということは、不男は現代のように性的少数者というくくられた世間での認識ではなかったのではないだろうか。なぜなら、日本には男色文化が昔からあったようだ。

●日本の男色

日本では、古くから寺院においては女人禁制の掟があり、女性と性交渉をすることは禁じられていたが、同性間の性交渉を禁じる掟というものはなく、同性を性的対象と見なすことと異性へのそれとの間には隔たりがなかったという。ただしこれらには、性交の対象となる女性が容易に見つからない状況下における機会的同性愛や、女性に近い容貌の美少年や女形などの女装少年への性行為など、異性愛が背景にあるものも含まれていたと考えられる。

・奈良・平安時代の寺院での男色

奈良・平安時代には仏教の広まりとともに、寺院での男色もかなり広まったと考えられている。奈良時代には貴族の子弟が寺院に入り、僧の身の回りの世話などをすることが制度として確立していた。男色の対象とされた少年達は、元々は稚児として寺に入った者達である。彼ら有髪の少年は寺稚児、垂髪、渴食などと呼ばれた。こうした稚児を寵愛する風習は、奈良時代以降かなり仏教界に広まっていた。天台宗などでは僧と稚児の初夜の前行われる「稚児灌頂(ちごかんじょう)」という儀式があり、稲垣足穂『少年愛の美学』に詳しい。灌頂を受けた稚児は観音菩薩の化身とされ、僧侶は灌頂を受けた稚児とのみ性交が許された。社内での男色を知る貴重な資料に、平安時代に成立したとされ、稚児灌頂について記された『弘児聖教秘伝』や、大分後のものだが京都醍醐寺所蔵の「稚児之草紙絵巻」

(元享元年、鎌倉末期) などがある。(『フリー百科事典 ウィキペディア (Wikipedia)』より)

● 仏教的観点では、性的感情を抱き欲求を満たそうとする対象に、若い男性や見習いの僧等が含まれていることから、男色は不邪淫戒を破ることになる。

三、世の名には「男性」と「女性」の二つの性別しかないのではなく 「男性」と「女性」の二つの性だけではない

公益財団法人人権教育啓発推進センター発行の『みんなが自分らしく 性の多様性を考える 性的指向 性自認 性的表現』に「最近まで、世の中には「男性」と「女性」の二つの性別しかない」と認識されてきました」とある。これまで的一般常識が非常識で、認識の誤りを啓発している。仏教的にはどうなのか調べてみる。

● 男・女・不男・不女の出現

・『大いなる帰滅の物語』(マハーサンヴァルタニーカーター、MSK) から観る

『大いなる帰滅の物語』は東インドの小乗仏教正量部に所属する仏教詩人サルヴァラクシタによって十二世紀に書かれた梵語の韻文作品である。その第二章から第六章は、インド小乗仏教の神話的な宇宙論が、技巧を凝らした芸術的文体で描かれている。ここに和訳する第二章四節から第四章第一節までは、古い仏教聖典の記述に基づいて、地上に人間が現れて後、次第に道德的に墮落しながら社会を形成してゆく人類の歴史が神話的に語られている。

・ 岡野潔教授 九州大学人文科学研究院、教授『大いなる帰滅の物語』(Mahāsānvarāṇikāthā) 第二章四節〜第四章一節と並行資料の翻訳研究には

○ 第一部MSKと文献Xの翻訳 第二章第四節死すべきもの(人間)の出現

〔2. 4. 1〕には、

それから後、二劫の間、「人の」身体を得た者たち、男・女・不男不女の「性的」区別がない体を有する、死すべきもの（人間）たちは、虚空の領域を「自由に」浮遊する者として、あたかも雲なき「空の」遊星たちの如く、自らの身体から発する光を伴って、世界の中を「あちらこちら」浮遊していた。

〔藏文§31〕

その後、各自の業によって「自然発生的に」生じた、虚空を「自由に」浮遊する、女・男・不男不女の「性的」区別がない、自ら「発する」光をもつ「肉体を有する」人間たちが、「地上世界に」生まれた。

・これらから、仏教的には、人間は最初から男性・女性・不男・不女がこの世に存在していることになる。

●ヒジュラ (Hijra) の存在

インド、パキスタン、バングラデシュなどの南アジアには男でも女でもないヒジュラと呼ばれる人が存在する。インドのヒジュラとは世俗社会の規範を捨ててヒンドゥー女神へ帰依する。何らかの身体的同一性（生まれながらの半陰陽など）を具えておらず、そのメンバーの大半が去勢を通じて所与としてジェンダーの超越を計る。歴史的には、紀元前一〇〇〇年頃から紀元前五〇〇〇年頃にかけてインドで編纂されたバラモン教とヒンドゥー教の聖典であるヴェーダにも登場する。釈尊がご在世の頃にヒジュラはすでに存在したことになる。

○国弘暁子師著『ヒジュラ…ジェンダーと宗教の境界域』には

- ・ヒジュラは世俗社会の人々の経済活動に頼りながら、ヒンドゥー女神のバクト（帰依者）として生きる。
- ・ヒンドゥー女神寺院に通うヒジュラたちは、乞食遊行をせずして寺院にて参詣者を待ち伏せし、参詣者からダクシーナ（布施）を受け取る。

・ヒジュラは、奇異な存在として人々に避けられる一方で、病気やトラブルなどの苦難を抱えた時、あるいは人生の門付を行う場面においては、ヒジュラと係り合う事はむしろ吉事を招くとも捉えられており、人々は女神のバクト

(帰依者)であるヒジュラに対してダクシーナ(布施)を支払う。ヒジュラは、女神のアシルワド (ashirvad 恩寵) を授与するという宗教的実践により、聖なる力を備えているということが顕示される。

・ヒジュラのもつ女性らしさはあくまでも女神により与えられた超自然的なもの。ヒジュラ自身もヒジュラとは女神の命のもと、女神の奇跡的な力によって誕生した存在であると語っている。

・ヒジュラとは男でもなく、女でもなく、そのどちらでもない両義的な存在であり、ヒジュラの〈両義性〉が他者にとって受け入れ可能となるのは「男性」や「女性」のジェンダー規範が及ばない聖と俗の境界線に切り結ばれる時であり、女神のバクト(帰依者)として他者から承認される時である。

○法華経が説かれた時には、「男性」でも「女性」でもないヒジュラが存在した。

○仏教やインド等では、性は男女の二つだけではなく多様性があり、特別な事ではなく社会においてごく自然なことであったのではないかと推察する。

四、おわり

●『宮沢賢治の真実 修羅を生きた詩人』より

この本の著者、今野勉は宮沢賢治の恋愛対象は異性ではなく同性であったことを解き明かしている。賢治は同性を恋う人間を妙法蓮華経はどう考えているのか、真正面から立ち向かおうとし答えを探した。本文中から抜粋、要約してみる。

妙法蓮華経譬喻品第三《今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子》「今、この宇宙のすべては私の領土である。

その領土にいる衆生は、ことごとく吾が子である。「吾が子」とは「仏の子」ということ。仏の子には区別はないゆえ、同性を恋うる者もまた仏の子として認められる。

妙法蓮華經化城喻品第七《譬如三千大千世界 所有地種 假使有人 磨以為墨 過於東方 千国土 乃下一点 大如微塵……》の「三千塵点劫」から賢治はこの宇宙に自分が存在する正当性を得ていたのではないかと作者は捉えた。「微塵」の訳を『現代語訳 法華経』の訳者、植木雅俊は「原子」と言いかえており、賢治は『春と修羅』の中で「このからだ そらのみちにちらばれ」という叫びの言葉を書きしるしている。賢治は、自分は、自然の一部であり、自然と一体であると実感してきた。己の中に「自然」そのもののように生まれた同性を恋慕う心をそれは「自然なもの」である感じていた。

●まとめ

・仏教では、もともと人間を男、女、という二つの性別だけで区別しておらず、それ以外の性も存在することがごく普通の事であったのではないだろうか。人間の身体を構成しているのは微塵の原子であり、人間も自然、環境、世界、地球、を構成する自然の一部である。性別での区別を超え、すべての人間は仏の子、仏の魂をもつ尊いものちであることを根本とする。

・仏教において、性的欲求、愛欲を心に抱くこと自体が戒を犯すこととなる。成仏を目標とする仏教徒は性的指向に関することは否定的な立場となる。

・よって、性的マイノリティ当事者で、身体と心の性が一致していないトランスジェンダーに関してはその苦しみに寄り添い、慈悲の心での布教を必要とする。その他のセクシュアリティ（人間の性）に関しては、性的マイノリティとは関係なしに四苦八苦の苦悩として相談に応じ、仏様の教えを伝えその苦悩を乗り越えていけるように手伝いをしていく必要があると考える。

参照、参考文献

法華經大講座 小林一郎著 文学博士 久保田正文増補

真訓対照 法華經三部経 三木随法 編著

法華経・全二十八章講義 浜島典彦著

法華経(中) 坂本幸男 岩本裕 訳注

現代日本語訳 法華経 正木晃 著

仏教の教えー釈尊と日蓮聖人 日蓮宗テキスト編集委員会【編】

仏教早わかり百科 監修 ひろさちや

『大いなる帰滅の物語』(MahasamvaranIkathā) 第二章四節〜第四章一節と並行資料の翻訳研究 岡野潔 著

『ヒジュラ…ジエンダーと宗教の境界域』 国弘 暁子 著

宮沢賢治の真実 修羅を生きた詩人 今野勉 著